

末摘花考

——常陸宮家の媒介としての香り——

石鍋雄大

はじめに

『源氏物語』において、末摘花は特徴的な人物だと言えるだろう。特に、彼女の特異な容貌、末摘花巻と蓬生巻の間のいわゆる変貌問題は多くの研究者に取り上げられ、多岐にわたる考察は示唆に富む。しかし、それらの先行研究の多さに比べ、末摘花が没落した宮家の娘であることに主眼を置いた論考は少なく、宮家という事実は安易に考えられがちである。本稿では宮家と末摘花との関係を中心に据えて考察を行う。その際、香や常陸宮邸に植えられた藤の香りを宮家と強い結び付きをもつものと考え、香りを切り口として、宮家と末摘花との関係を捉えなおすことを目的とする。

『源氏物語』において、薫物や衣に染みついた香りなどは、人物の性格などを表す機能をもつ。例えば、梅枝巻の薫物合わせて女君たちが作る香は、紫の上の梅花が

「はなやかにいまめかしう、すこしはやく心しらいを添へて、めづらしき薫り加はれり」、花散里の荷葉は「さま変わり、しめやかなる香して、あはれになつかし」と評され、その評価は人物像と一致していると考えられる。

また、宿直人が薫の香りの染みついた衣を着て、その「似つかはしからぬ袖の香」を、周囲から咎められる場面や、薫の移り香が中の君からただよい二人の関係が露見する場面などがある。香りは人物の個性と密着しており、人物を理解する上で重要な役割を果たす。

末摘花の周囲に現れる香りは主に四つある。光源氏との出会いの際の「えひ香」、末摘花が侍従に送る「薫衣香」、光源氏との再会の際にただよう「藤」、そしてその際、末摘花の衣に染みついている「香の御唐櫃」の香りである。

これら四つの香りの中から末摘花と光源氏の出会いと再会に関わる「えひ香」、「藤」、「香の御唐櫃」の香りについて見ていきたい。

一、「えひ香」と人を表す香り

まず、「えひ香」とは何か、次に、香りが人を表すということについて整理する。

「えひ香」は末摘花が光源氏との出会いの際に纏っていたもので、『和名類聚抄』は「裛衣香」、「衣比香」などと表記する。形状は今でいう匂い袋のようなもので防虫の役割を果たす衣用の香である。

『源氏物語』の時代、香は高級品であり、コネクションや富がなくては得ることができない栄華の象徴でもあった。⁴その上、『花鳥餘情』はこの香を「裛香俗云衣比邪王家方に裛衣香ありこれをえひの香といふ」、「麝香半分沈香二分白壇三分一以上いづれもさい上をえらひてませしなり」と記す。ここから、「えひ香」は元来高価な香の中でも特に贅沢なものであり、限られた人間のみが所持できる香であると推察される。宮家だからこそ持ち得た香なのだろう。

しかし、末摘花巻での末摘花の生活は困窮しており、このような高価な香を得るための手段を持ち合わせてはいなかった。

父親王おはしけるをりにだに、古りにたるあたりと

ておとなひきこゆる人もなかりけるを、まして今は、
浅茅分くる人も跡絶えたるに

(末摘花、二七八・二七九)⁶

没落し、さらに世間とも断絶している末摘花にとつて、父常陸宮の死後に新たな「えひ香」を入手する機会があったとは考えにくい。末摘花が纏う「えひ香」は、常陸宮在世時に手に入れた、または作成したものの残りだと考えるのが妥当であろう。

また、『源氏物語』には、末摘花巻の他に一例「えひ香」の用例がある。そこで「えひ香」は、明石の君の部屋で唐物の調度の一部として描かれている。元三位の中將の娘という明石の君の出自からも、この香のもつ高貴性が確認できよう。

唐の綺のごとしき緑さしたる褥にをかしげなる
琴うちおき、わざとめきよしある火桶に、侍従をく
ゆらかして物ごとにしめたるに、裛被香の香の紛へ
ると艶なり。(初音巻、一四九)

さらに、この初音巻の描写や常陸宮の遺品に唐物が多くあることなどを勘案すると「えひ香」が、唐風の香りの

香であると推測できる。

これらは、「えひ香」を常陸宮の生前入手したという根拠の一つとなるだろう。「えひ香」は末摘花のものと言うよりも、常陸宮家のものだと考えた方がよさそうである。では、常陸宮家の「えひ香」は、末裔である末摘花を表していると言えるのだろうか。本文に即して考えたい。

「えひ香」は末摘花が光源氏と襖越しに対面する際、光源氏に次のように働きかける。

えひの香いとなつかしう薫り出でて、おほどかなるを、さればよと思す。(末摘花、二八二)

光源氏は、まだ見ぬ末摘花を「なつかしう薫り出でて、おほどかなる」「えひ香(えひの香)」から予測し、「さればよ」自分の想像通りの姫君だと思っている。しかし、末摘花は素養、容貌ともに光源氏の予想を裏切る。暗闇で体に触れただけで「心得ずなまいとほし」と疑念を抱くほどである。

「えひ香」は光源氏の間違った予想を助長させるのであるから、香りが人物を表すという論は成立しないように思われる。このことを三田村雅子氏は「古い宮家の娘であるという家の格は、外見の衰えや窮乏にもかかわら

ず、おのずと匂い立つてくる香によって証し立てられるように描かれていた」と説明するが、はたしてそうだろうか。たしかに「えひ香」が表すのは、富と栄華など「家の格」であろう。そしてそれは、光源氏の予想した姫君が纏うにはふさわしい香りであった。しかし、常陸宮家の末裔であるにもかかわらず、現実の末摘花は困窮をきわめており、富や栄華からかけ離れている。さらに、過度に格式を重んじたふるまいはしばしば光源氏に嘲笑されている。容貌も富も教養も、宮家として持ち合わせているべきものをほとんどもない末摘花と、香りが表すものは合致していない。この場面で光源氏は、末摘花自身の香りではない、常陸宮家の栄華を表す香りを、末摘花自身の情報として受け取ったと考えられる。香りは入手時のまま「家の格」を表してはいるが、末摘花がそれからずれてしまっているのである。

こうして「えひ香」は、光源氏が元々もっていた美しい姫君としての想像を確信へと導いた。しかし、これは香りだけが要因として起こったことであろうか。末摘花巻以外の巻も視野に入れ、『源氏物語』の人を表す香りについて言及する。

本人の姿が闇の中などで見えなくとも、香りによって人物が表わされる例を二つ挙げる。

①源氏「やや」とのたまふにあやしくて、探り寄りたるにぞ、いみじく匂ひ満ちて、顔にもくゆりかかる心地するに思ひよりぬ。(帚木、一〇〇)

②かかるけはひのいとかうばしくうち匂ふに(中略)あさましくおぼえて、ともかくも思ひ分かれず、やをら起き出でて生絹なる単衣をひとつ着てすべり出でにけり。(空蟬、一二四)

どちらも光源氏の香りで、香りを嗅いだ人物は、それだけで光源氏だと把握している。光源氏と面識がある人物であれば、この香りを光源氏のものだと知っていた可能性があるが、光源氏がいつも同じ香りを纏っていると限らない。それでも①②のように分かるのは、光源氏の纏う香りが、他の人物が所持できるような一般的な香りとは一線を画すものであるからであり、それによって大まかな人物像、果ては光源氏だということまで把握できるのだろう。

しかし、光源氏や頭中将などの高貴な香りが、本人ではなく他人と結び付いて認識される場合もある。

③近う呼び寄せたてまつりたまへるに、かの御移り香のいみじう艶に染みかへりたまへれば、宮「をかしの御匂ひや。御衣はいと萎えて」と心苦しげに思いたり。(若紫、二四八)

④いとかうばしき香のうちそよめき出でつるは、冠者の君のおはしましつるとこそ思ひつれ。(少女、三九)

③では、光源氏の移り香を、若紫の父が若紫自身の香りと誤解し、④では、雲居雁の女房が冠者の君(夕霧)の香りと内大臣(昔の頭中将)の香りを間違えたと述べる。③では、長期間離れていたとはいえ、娘の香りを間違えている。光源氏が纏うような香りを、若紫が纏っていることに違和感を感じない。娘に対する愛情が、疑念を生じさせないのであろう。④は自分が仕えている人の父の香りを把握できていない。夕霧も内大臣も、纏う香りは抜きん出していたと考えられるが、女房達はそれ以上の区別がつかなかったのだと考えられる。

このように、『源氏物語』では、光源氏程の高貴な香りできえも、他の人物の香りだと誤認されることがある。これは、香り自体が人を欺こうとして機能しているわけ

ではなく、人々の素養や盲信が判断を誤らせている^⑩。香りが人物を表すことは確かであるが、読み違えられることも忘れてはならない。末摘花巻の場合も同様だったのである。

二、夕顔の面影と「なつかし」き香

第二章では、香りは受け取る側によって判断が変わり得るということについて、主に光源氏と夕顔との関係から考える。末摘花との出会いが、夕顔を希求することに端を発しているため関わりが深いこと、そして夕顔巻にも香りが現れていることが理由である。末摘花巻の冒頭は次のように始まる。

思へどもなほあかざりし夕顔の露に遅れし心地を、
年月経れど思し忘れず、ここもかしこも、うちとけぬかぎりの、気色ばみ心深き方の御いどましさに、
け近くうちとけたりし、あはれに似るものなう恋しく思ほえたまふ。(末摘花、二六五)

ここで描かれる夕顔への思いが断ち切れない光源氏の心

情は、この巻において夕顔が何らかの形で影響してくることを予期させる。また、その後、末摘花へ思いを寄せる光源氏の様子にも夕顔との関連が見てとれる。

かの砧の音も、耳につきて聞きにくなりしさへ、恋しう思し出でらるるままに、常陸の宮にはしばしば聞こえたまへど(末摘花、二七七)

光源氏は夕顔と聞いた「かの砧の音」を「思い出でらるるままに」末摘花に手紙を送っている。光源氏の末摘花への執着は亡き夕顔への追慕がもととなっていることが分かる。

これらのことから、光源氏がまだ見ぬ末摘花を想像する背景には、夕顔の存在が色濃くあったと言えよう。さらに、光源氏が知っている夕顔の情報は、従者である右近から聞かされたものが大きい、そこで語られる夕顔と末摘花の共通点をまとめると、次の表のようになる。

(一) 内は筆者。

頭中将	住居	性格	出自	家族	夕顔	末摘花
<p>(頭中将が)三年ばかりは心ざしあるさまに通ひたまひしを (頭中将が関係を持っていた)</p>	<p>それもいと見苦しきに住みわびたまひて (見苦しい所に住んでいる)</p>	<p>世の人に似ずものづつみをしたまひて (世間の人に似ず、内気)</p>	<p>三位中将となん聞こえし。いとらうたきものに思ひきこえたまへりしかど (三位の中將という高官の娘)</p>	<p>親たちははや亡せたまひにき。 (両親は死去)</p>	<p>心細く残りゐたる。 (両親は死去)</p>	<p>その後、こなたかなた(光源氏や頭中将)より文などやりたまふべし。 (頭中将が関係を持つとす)</p>
	<p>いといたう荒れわたりて、さびしき所に (荒れて寂しい所に住んでいる)</p>	<p>ひとへにもものづつみし、ひき入りたる (ただもう遠慮深く、内気)</p>	<p>故常陸の親王の末にまうけていみじうかなしうかしづきたまひし御むすめ (常陸宮という親王の娘)</p>			

対面前の末摘花と夕顔はよく似ているのである。これは、紫式部が意図的に仕組んだものであろう。これらの共通点から立ち現れる夕顔のような末摘花像は、香りによって確実なものとなる。夕顔との出会いにも末摘花の時と

同様に「なつかし」い香りがあったのである。

修法など、またまたはじむべきことなどおきてのたまはせて、出でたまふとて、惟光に紙燭召して、ありつる扇御覧ずれば、もて馴らしたる移り香いとしみ深うなつかしくて、をかしうすさび書きたり。

(夕顔、一三九)

光源氏はこの夕顔の扇に焚きしめられた「なつかし」い香りに惹かれて逢瀬を行った。多くの共通点をもつ末摘花から夕顔巻と同じように「なつかし」い香りがただよふことは、夕顔の面影を負った女性としての想像をより強固にさせたのである。

では、末摘花が庇護されるのは、光源氏の思い違いが全ての要因なのだろうか。もう一度物語に戻り、末摘花の側から考えると、この「えひ香」は、末摘花の意図しないところで付与されていることが分かる。

よろしき御衣奉りかへ、つくろひきこゆれば、正身は、何の心げさうもなくしておはす。(末摘花、二八二)

末摘花は光源氏と対面する際に「よろしき御衣」に着替

える。「えひ香」が防虫香であることを考慮すると、この衣は光源氏と対面するために、保管されていたものを取り出したことになる。また、襖を挟んだ光源氏にまで感じられるほど香りが染み付いているのであるから、長期間保管するような大切な衣装であるとも考えられる。衣も「えひ香」も末摘花が普段から纏っているものではなかったのである。常陸宮家隆盛時の衣と香りは、現在の末摘花を表さないが、光源氏を誤認させ、末摘花が生涯庇護されるきっかけとなる。人生の分岐点となる重要な場面であるが、本人は「正身は、何の心げさうもなくしておはす」と無意識で、香りは効果を意識した意図的な演出ではなかった。末摘花の香りが光源氏に効果的に働きかける際には、このように彼女の意志が介在しないことがある。末摘花は自分も知らないところで常陸宮家に守られていると言えるのではないだろうか。次章からは、このことが端的に示されていると思われる、蓬生巻における光源氏と末摘花再会時の香りを考察する。

三、常陸宮家の「香の御唐櫃」の香り

第一章では、末摘花の纏う香りは常陸宮家のものでは

ること、第二章では、夕顔の存在が、宮家の香りを末摘花そのものであるかのように思わせる要因となっていることが分かった。しかし、宮家の香りが末摘花を表していないにも関わらず、末摘花が高い評価を受ける理由になっっていることは確かである。ここに、香りを遺した宮家の力を見ることができるのでないだろうか。第三章では、末摘花に働きかける「香の御唐櫃」の香り、第四章では、光源氏に働く「藤」の香りに着目し、宮家の力を考察する。

藤井貞和氏は、光源氏と末摘花を結びつけたのは、常陸宮の亡霊であったとする¹¹。この論に従いたい。蓬生巻で光源氏と会う直前、末摘花は常陸宮の夢を見る。

ここには、いとどながめまさるころにて、つくづくとおはしけるに、昼寝の夢に故宮の見えたまひければ（蓬生、三四五）

この夢は見たという事実以上のことは語られない。しかし、父の死によつて生命に危機が及び、夢を見、救われるという構造は、光源氏須磨流謫の際に現れる桐壺帝の霊夢の構造と類似していると言えよう。西郷信綱氏によれば、古代における夢は、祭式的な手続きを経て見るこ

とができるものであるが、桐壺帝の霊夢の場合は光源氏の「禁欲的な精進が、祭式的隔離と同様の意味を持ったのではないか」と、手続きは意図せず行われていたと指摘される。末摘花の場合も同様に考えてよいのではないだろうか。蓬生巻において、困窮をきわめつつも光源氏を待ち続けた末摘花は、光源氏が夢見の後、桐壺帝に救われるように、常陸宮に救われるのである。蓬生巻の夢と香りがどのように関連しているのか見ることで、宮家の霊験について論じたい。

蓬生巻での再会時、光源氏が末摘花に高評価を与える一要因として、またしても香りが関連する。末摘花は光源氏との対面時、叔母である大弐の北の方の衣を着ている。その衣の香りは、光源氏に末摘花を「ねびまさりたまへるにや」末摘花巻での対面時よりも成長したのではないかと評価させる一因となり、この場面を演出する。

末摘花 年をへてまつしるしなきわが宿を花のたよりにすぎぬばかりか

と忍びやかにうちみじろきたまへるけはひも、袖の香も、昔よりはねびまさりたまへるにやと思さる。

(蓬生、三五二)

光源氏は「つきづきしうのたまひすぐして出でたまひなむと」していたところであったが、こうして引き止められる。今までの末摘花からは考えられないほどの期待感をもたせたふるまいと香である。瀬戸宏太氏は、末摘花の「袖の香」が成長の証として気配と同列に捉えられていることに着目し、衣の香りや変貌には常陸宮の霊威が大きく関与しているとみる。末摘花のふるまいは、この前に「例ならず世づきたまひて」とあることから分かるように、普段のふるまいには霊威が関わっていると考えるべきであろう。

そもそも、この衣を着る際にも香りが影響していた。

大弐の北の方の奉りおきし御衣どもをも、心ゆかず思されしゆかりに、見入れたまはざりけるを、この人々の香の御唐櫃に入れたりけるがいとなつかしき香したるを奉りければ、いかがはせむに着かへたまひて、かのすすけたる御几帳ひき寄せておはす。

(蓬生、三四九)

末摘花は、叔母によい感情を抱いていないため、衣を香の御唐櫃にしまっていた。しかし、老女に差し出された

際、「なつかしき香」がただよっているので、「いかがはせむ」と着ている。ここでも末摘花は、香りが光源氏に与える影響を考慮してはいない。香り自体が末摘花に纏われようとしているかのようになっている。夢見を起点とした、末摘花を助けるための霊験の一つであろうと考えられる。夢の後に突然周囲を整えはじめたことが、結果として光源氏との再会を印象深くしたように、この衣の着用も万全の状態で光源氏との再会を迎えさせようとする常陸宮の力によって行われたのである。

また、ここで注目したいのが、末摘花が自分自身の香りに評価を行っていることである。『源氏物語』の香りに関する記述の中で、自らの香りについて評価をする例はほとんど見当たらない。¹⁵。そもそも嗅覚には、一定時間刺激を受け続けると感じなくなるという特徴がある。¹⁶。よって、部屋に染みついた香りや、衣に薫きつけて日々使用している香りであればある程評価は困難となり、末摘花が「なつかし」と感じるのは、それが普段から自分が纏っている香りとは異なるからだと考えることができる。最早末摘花自身にとっても宮家伝来の香りは自分のものではないのである。三田村氏は、この香の御唐櫃の香りによって薫染された衣を、「無自覚のうちに、おのずと宮家の気品と家格の高さを主張するもの」と、家格の高さを

示す香りだとし、末摘花本来の品格を表すとしている。おおむね異論はないが、先述した香りの特徴を考えれば、ここでも香りが表すのはあくまでも常陸宮家であり、末摘花ではないことがわかる。末摘花の意図を超えたところで働く常陸宮家の香りは、末摘花には衣を着せ、光源氏には末摘花の評価を高めさせる霊験である。末摘花巻、蓬生巻ともに高い評価を下される香りには、末摘花を救うための宮家の意志を見ることができよう。

四、常陸宮の霊威と「藤」の香り

光源氏と末摘花の再会は「藤」の香りがきっかけであると言つてよいだろう。

大きな松に藤の咲きかかりて月影になよびたる、
風につきてさと匂ふがなつかしく、そこはかとなき
かをりなり。橘にかはりてをかしければさし出でた
まへるに、柳もいたうしだりて、築地もさはらねば
乱れ伏したり。(蓬生、三四四)

光源氏はこの香りによって、この家が常陸宮邸だと気付

く。さらに、「さし出でたまへる」と、車から身を乗り出して、元々車内にて周囲は見えていなかった筈である。香りが無ければ、このまま通り過ぎており、藤の香りが末摘花の運命を決めている。

この描写は、末摘花が見た夢の前に描かれるが、時系列的には、夢の後の出来事だと考えるのが自然である。常陸宮が現れる夢を挟んだ短い文章の中で、香りが続いて光源氏と末摘花に働きかけていることは、偶然ではないだろう。光源氏に対しては、末摘花との出会いを促し、末摘花には、万全の状態ですえようとして働きかけていると考えられるのである。宮家の香りは明らかに二人を結びつけようと働いている。

ここでの香りの発生源は「藤」だが、本文には「橘に変はりてをかし」と橘と並んで示されている。ここで橘が比較に出されているのは、光源氏が花散里の元へ行く途中だったため、花散里と関わりのある橘が示されているのである¹⁸。しかし、末摘花の家にも橘はあった筈である。

橘の木の埋もれたる、御隨身召して払はせたまふ。

(末摘花、二九六)

それでも、橘からではなく、藤から香りが漂うということには意味があるのではないだろうか。

まず、思いがけない香りということ、光源氏に感興をわかせるものであったことは間違いないだろう。それに加え、藤は『合本源氏物語事典』では、「飛香舎(藤壺)を始め、貴紳の家にも植えられ、藤花の宴が催された¹⁹。」とある。貴紳、つまり名声の高い男子であった常陸宮の霊が媒介とするに足る花だったと言えるのではないか。

次に、『古今和歌集』以降、松と藤は歌題として「藤花懸樹」「藤松樹花」のように類型的な組み合わせとして存在していたことに着目したい。この組み合わせを片桐洋一氏は、

松は常緑の常盤木であり、藤は「吹散り」なりと付会する民間語原説の示すごとく、はかない片時の花である。しかし、この藤が松にかかるがゆえに久遠の可能性を示す。かくて「藤と松」の絵柄は、女子を後宮に入れ、皇室と婚姻関係を結ぶこと²⁰によって確立された藤原氏摂関政治のシムボルとなる。

とする。片桐氏によれば、常緑樹の松は皇室として悠久の時を表すものであるが、蓬生巻の場合、松は末摘花の

暗喩であろう。武原弘氏が、和歌の理念や表現から、松についての考察を行い、松は「待つ恋」物語の主題形成、「待つ女」末摘花像造形に直結するもの」と結論付けるように、松を末摘花と考え、咲きかかる藤を常陸宮、藤の香りを常陸宮の靈威と考えると、光源氏は藤の香り（常陸宮の靈威）によって、松（末摘花）に気付くことになるのである。ここでの「松」のイメージには、末摘花の「待つ」姿勢が暗示されており、藤のはかなさには、宮家が滅びようとしていることが示されているとも読むことができる。それに加えて、「大きな松に藤の咲きかかり」という表現は、「和歌や散文では、藤が松に絡みつき花を垂らしている様子を表現する際、藤が松に「かかる」または藤を松に「かく」とすることが多い」とされる。今までの論に即して読めば、末摘花にはいつでもその周囲に宮家というものがまつわっていると読め、藤と松の裏にある常陸宮家と末摘花の関係がより鮮明に見えてくる。また、室伏信助氏は末摘花の元に光源氏が訪れる際には必ずと言ってよいほど松の木が現れるとし、

松杉等の樹木が、語りに不可缺の要件として語れて行くが、發想の根柢を見つめれば、かの「柱立て」や「しばさし」等の信仰行事に見られるのと同様、これら

の樹木を傳はつて、神が降るといふ觀想を藏してゐる。²³

と指摘する。實際、蓬生巻では庭に木霊が現れている描写があつた。それだけでなく、常陸宮邸は梟や狐などがはびこる靈的な空間へと変化している。一般に夢などの靈的媒介を通して現実世界へ影響を及ぼす靈魂が、香りを通じて直接光源氏に働きかけることができたのは、このように常陸宮邸が靈界の様相を呈していたことが関係しよう。靈界から夢を通い路として現れた常陸宮は、常陸宮邸が靈的な空間に近いからこそ、松、藤という草木を通じて働きかけることができたのである。そして、松が靈威を媒介しやすい木であることは、松が末摘花を表す傍証ともなろう。「松」が神を降らせるように、「待つ」ことで常陸宮の靈を喚んでいるからである。

蓬生巻の藤の香りは常陸宮の靈の媒介となり、末摘花と光源氏を引き合わせるという役割を担っているのである。

五、おわりに

末摘花の周囲の香りは、厳密にいえば末摘花のものでなく、常陸宮家に関わる香りであった。そしてそれは、光源氏と末摘花の出会いと再会を印象的にし、末摘花に庇護を受けさせ、最終的には二条東院への招致へとつながってゆく。末摘花の人生のターニングポイントにはいつも宮家の存在があった。常陸宮家の祖霊が末摘花の不憫な生活を見かねて、救うために現れていたのだろうか。

特に、末摘花が常陸宮を幻視した夢の後に香りの影響が強く表れることから、常陸宮が末摘花を救ったのだと考えられよう。これらのことから、末摘花が何もせず不幸せを享受しているようにも見えるがそうではない。祖霊が香りを媒介として末摘花の周囲に現れ続けたのは、末摘花が叔母や受領にも負けず、宮家としての矜恃をもち続けたことが理由としてあろう。具体的には、木立や調度、邸宅を手離さなかったことの賜だろう。

拙稿では、香りを通して宮家が末摘花の人生で果たした役割について言及した。末摘花を考える際の宮家の重要性の一端を示すことができたのではないだろうか。しかし、この問題については光源氏の宮家の捉え方など、さらに多角的な検討が必要であろう。今後の課題としたい。

(1)

三田村雅子『源氏物語 感覚の論理』、有精堂、一九九六、一七九〜一九六頁など。

(2)

京都大学文学部国語学国文学研究室編『諸本集成倭名類聚抄〔本文編〕』、臨川書店、一九六八、三〇二頁

(3)

薫物であるとの指摘もあるが、ここでは『うつほ物語』での用例や、奈良国立博物館『第六十三回「正倉院展」目録 〔平成二十三年〕』、仏教美術協会、二〇一一、三四、三五頁などに従う。

(4)

吉村晶子「平安文化における薫物——その意味の多様性から——」（『王朝文学と服飾・容飾』、竹林舎、二〇一〇）、河添房江『光源氏が愛した王朝ブランド品』、角川学芸出版、二〇〇八など。

(5)

伊井春樹編『源氏物語古注集成 第1巻 松永本 花鳥餘情』、桜楓社、一九七八

(6)

『源氏物語』の本文引用はすべて、阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注訳『新編日本古典文学全集①⑥』（小学館、一九九四〜一九九八年）に拠る。また、()の内には巻名、および「新編古典文学全集」の頁数を示した。

(7)

尾崎左永子『源氏の薫り』、一九九二、朝日新聞

- 社、四十頁では、唐のそのものの香りよりも、日本的に改良された香りであろうとしている。
- (8) 三田村前掲書、一八一頁
- (9) 森野正弘「源氏物語の薰物合せにおける季節と時間」(『山口国文』、二六号、山口大学人文学部国語国文学会、二〇〇三) 森野氏によれば、香にはそれぞれ「法」があり、それに準拠することが重要だったとする。宮家の「えひ香」とそれが表すものが不変であることを裏付けるだろう。
- (10) 三田村前掲書、一七九〜一九六頁、吉村晶子『身体が匂う』ということ ― 薫の体香の再考に向けて― (『源氏物語をいま読み解く② 薫りの源氏物語』、翰林書房、二〇〇八)
- (11) 藤井貞和「蓬生」(『國文學 解釈と教材の研究』、十九卷、十号、學燈社、一九七四)
- (12) 西郷信綱『古代人と夢』、平凡社、一九七二、二〇頁
- (13) 日向一雅『源氏物語の主題 「家」の遺志と宿世の物語の構造』、桜楓社、一九八三、一二三頁
- (14) 瀬戸宏太「源氏物語の薫香 ― 末摘花と紫上をめぐって―」(『國語と國文學』、六九卷、九号、
- (15) 至文堂、一九九二) 瀬戸氏は「袖の香」を中心に論じるが、本稿では「袖の香」に限らず、藤の香りも常陸宮と強く関わる問題だと考える。薫が自分の香りを、厄介に思う場面があるが、それは香り自体に対してではなく、自分の香りの影響についての評価である。
- うち忍び立ち寄りむ物の隈もしるきほのめきの隠れあるまじきにうるさがりて、をさをさ取りもつけたまはねど、あまたの御唐櫃に埋もれたる香の香どもも、この君のはいふよしもなき匂ひを加へ、御前の花の木も、はかなく袖かけたまふ梅の香は、春雨の雫にも濡れ、身にしむる人多く、秋の野に主なき藤袴も、もとの薫りは隠れて、なつかしき追風ことにをりなしながらなむまさりける(匂兵部卿宮、二七)
- (16) Trygg Engen 著・吉田正昭訳『匂いの心理学』、西村書店、一九九〇
- (17) 三田村前掲書、一八一頁
- (18) 『新編日本古典文学全集』(21) 源氏物語②』、三四四頁、頭注二二
- (19) 池田亀鑑編『合本源氏物語事典』、東京堂出版、再版、一九八七、「藤」の項

(20)

片桐洋一「松にかかれる藤浪の——古今集時代研究序説のうち——」（『季刊文学・語学』、二十号、三省堂、一九六二）

(21)

武原弘「対偶人物法で読む『源氏物語』——末摘花と花散里——」（『梅光学院大学・女子短期大学部論集』、三六号、二〇〇三）

(22)

原山絵美子『源氏物語』竹河卷「手にかくる」歌と「むらさきの」歌について——松にかかる藤——」（『比較日本学教育研究センター研究年報』、五号、お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター、二〇〇九）

(23)

室伏信助「末摘花について——源氏物語の發想法——」（『國語と國文學』、三三卷、五号、至文堂、一九五六年）

(24)

伊藤益「夢と遊離魂——日本古代の夢観——」（『倫理学』、四号、筑波大学倫理学原論研究会、一九八六）伊藤氏は、神と人との接触到「靈的な事物を媒介」とする必要があったと述べる。

（平成二十一年度 教育学部国語専修卒業生）

八月歌舞伎鑑賞教室

平家女護島 俊寛 鬼界ヶ島の場

歌舞伎を鑑賞するのはこれが初めてで、鑑賞する前は歌舞伎に堅苦しいイメージを持っていました。しかし、鑑賞教室ということで最初に歌舞伎についての説明があり、その後実際に歌舞伎を鑑賞するという構成で行われ、初心者でも安心して鑑賞することが出来ました。

『俊寛』の内容は、千鳥と成経の身分違いの恋を成就させようという俊寛の自己犠牲の悲劇であり、話が展開していくにつれ、俊寛の姿に胸を打たれました。都に戻っても、自分を待つ人はいないから、とそんな自分の代わりに千鳥を船に乗せようと妹尾と斬りつけ合う俊寛の姿が印象に残っています。また、演じる役者さんたちはその役に相応しい動作や声の出し方をすることで役の特徴を表していて、誇張した動作などには面白味もありましたが、演技の迫力を感じました。歌舞伎では、男性が女性の役を演じる、ということを知識として知っていましたが、千鳥の素朴なかわいらしさを表す仕草、乗船を拒否された時の悲しげな声の出し方など、実際男性が演じているのを見て、その動作一つ一つの細やかさに驚きました。

内容が悲しいような切ないような気持ちにさせられるものでしたから「面白い」という言葉は似つかわしくありませんが、「歌舞伎って面白いな」と思い、歌舞伎の魅力に気づけたように思います。この機会に歌舞伎を鑑賞することが出来て良かったです。

（日文三年 岡部 杏）